朝夷巡嶋記

第二編　巻三

113
939
8

413
939
巻 3

朝夷巡嶋記全傳第二編巻之三

東都　曲亭主人　編輯

初輯第十五　悪を罰き剱の山麓　善ふ慶ふ百田の宿

さて況その夜さ至朝夷三郎義秀ハ根岐莖平ハ竹輿を舁しく剱乃山麓へと赴くふ。廿四日の月いちぐ生ぎ。るは烏夜るぐら悪棍ホこ。あちこちとおろんちとく。蕉火を把せるども件の小厮ハ月来日来熟さる路るれば物とも思ふぐ。郷導をさ居ぬ義秀こまを呼ぶけくこの行程を問ーぐ。足久ゑとあへぐ肩とかえ剱岳の麓へハ三里あちらこもゆうん入一條の提経あり。みちの程難所ゑ至ども二里ふるは近ゑ。いづまの路より赴ゑふ。と問ゑさまてくされがとよ。ゑ途の嶮岨を厭ぐ。近ゑくこをよろこなま。

急こと奬せば根ゆ茎平ところ沼果く。提徑よりぞ進まけ現ゆ途ハ難き
るまどもるまと後まと」と急ぎーぶその夜子の比及ゆ劔の山麓ちく来ち。
振離瞻れバ天色出ぐ月のけうひせり。當下根助茎平ハ道次ゆ竹輿を
もろーう客人この処より山の主ゑ宿所へハ三四町の間るり原ハ慈航寺といふ
山寺るまと」う近属頽廢ーく住持るーよりて彼魔平太ホハ老僧道人を逐
出ーく。この廢院ゆ落草たまと客殿いまぐ破損せざまハ其処ゆ住ひいとぞ。
ある人のヤスるう路ハいと直まぶ迷せゆべうとあらぐ。こゆく暇系ゆれば
とふゆ義秀うち点ぢさてハたゆ公安ろ。和連ハ且く樹下ゆ休ひて暗号を
ゆち孫るまあそろ」とく地所へ退ふハ越度るゆ人と警まハ二人の小厮を
唯ことと仏く竹輿系扛よせて。草折布て坐を占ろ。義秀ハロハいとと彼慈航
寺ゆ来てゑまぶ門傾ゑ牆破まく。鎖せども甲斐るく溝埋ま橋ちく。
郤渡易ろ。その為体夜目るまぶ定ろゆハゑ弦ども処ゑゆ樹立ろりて。昔
由緒ある梵刹とおぢー破牆の裾潛入りるく人をる方へと進む程ゆ本堂経堂
の餘波ゆや柱石のまろう陥ゆ跌ーとて歩系運ー。根の邑ち遣まハ前面ゆ
ゆまとる陥麓舎あるるく。人の泣声笑ハ声を秋るゆ暑ゑ比るれば雨戸
みゆとろ校ろ。燈燭いと明るまハ庭の芳宜を木稍みるく間ちくなせく
闕窺まぶ番ゑ座席の中央ゆいと大ゑるう俎板系机のごく推直ー。唯妍
るう一個の處女をそぶ上ゆ推伏く。悪鬼ゆ等ーゑ暴漢格子織乃浴衣ゆ
圓括の帶ゆ結びく。緋の続鳧褌の垂をあらハ」處女が黒髪ゆかくま
へく。右ゆゆ創肉の庖刀を閃ー。女郎オいるゆ本夏をろるや。汝がゆうるう
靡せんと。ぶてそ舜優ーく。甲夜ゆと機嫌をとふせもろまと隨ぬとて許
さんや否るぶこの肉刀をあく。胷ともいゆ臍ときゆ孔穿融ろく嚢環ゆ

せんいふ欽慮うと髻を推動しく嘖むの崑山の主魔平太るるべーそが
そとるふ列居る優ぎ家ゝぬ暴夷眉太く面赤きあるる月額黑く脫書き
あるる眼圓ふ口大るるるあり。髯ハ虎の如く鼻ハ狻猊ゝ似るあるるあるの巨盃を
引受く盃盤狼藉擅ふ飲食きつ前るる一人が筋ゝく俎板の端を敲き
汝よゝぐ雛ぞや主どゝよそゝるくるよ翌るる已ホ由ゝふ紙卑る天窟ゝ
可懼あの邑郡司莊司の妻ゝるるるより一トは愛ゝ晉とあるる嫌ハ安ぐて
宜府へ嫁りゝるぐ疼目ゝるふるる国房で痛目ゝるるよ目を
細めく喻せび共ゝ呼びうけく雛けくと責るるの是則越の赤熊太三九二
中太夷守水六臭水沼太郎とく魔平ゝあるぬ悪棍るるべ。ゝるるる外ふ
八九人醉ゝく縁頬ゝ臥ゝ居るるる地藏和漬ふ鮮蹈の唱歌あるるふぬ古ふ祝声
合ゝくゝ拍子とるる唄ふあり。又魔平太ゝ後方ふ妍き女の子西三人大

ゝるる国扇をるくく。おそるくあるふるくをり彼ホとゝふ畧ゝ畧ゝ畧ゝ已ゝ然ゝど
後ふるるふ夫祖板ゝの畧ゝ畧ゝ已ゝ處女ゝそ友鶴るるふ現や縡の爲倚大江山
邊ふ人を畧ゝむゝの酒顛茨鬼ふ茅るるゝ鬼癖者かるゝと美秀自向自荅
ゝるくく早るゝるるゝ然ふ。ゝるるゝ殺ゝく入るるるゝ端近くゝる奴們ゝ雛ゝ
易ゝく處女を救ふゝふ難ゝ不意ふ起ゝく背ゝるゝ彼魔平太を拉ゝ輒く
處女を救ふ吁ゝるるる。と尋思ゝる退きて足ゝふ背門のゝふ起けゝ。
庖湢の樞戸開ゝくゝあゝゝ。ゝくゝゝ進ゝ入ゝるふ暗ゝく人氣ゝ次の房ゝ
ゝゝ鼾の声高く呼ふふゝて見ゝゝ丈豊ふの悪棍ゝゝ十餘人前後不覺ふ
醉臥ゝ反吐を抗ゝゝるゝあゝ赤裸ふるるゝゝるるあゝ美秀ハゝゝゝかるゝて。
今代奴ホを殺ゝるゝ魔平太ホゝゝるるゝゝ又魔平太を雛ゝゝゝ代奴等
覺ゝく逃亡るゝふせゝと柱ふ掛ゝる燈蓋の灯を搔立て彼此をゝく視ふ

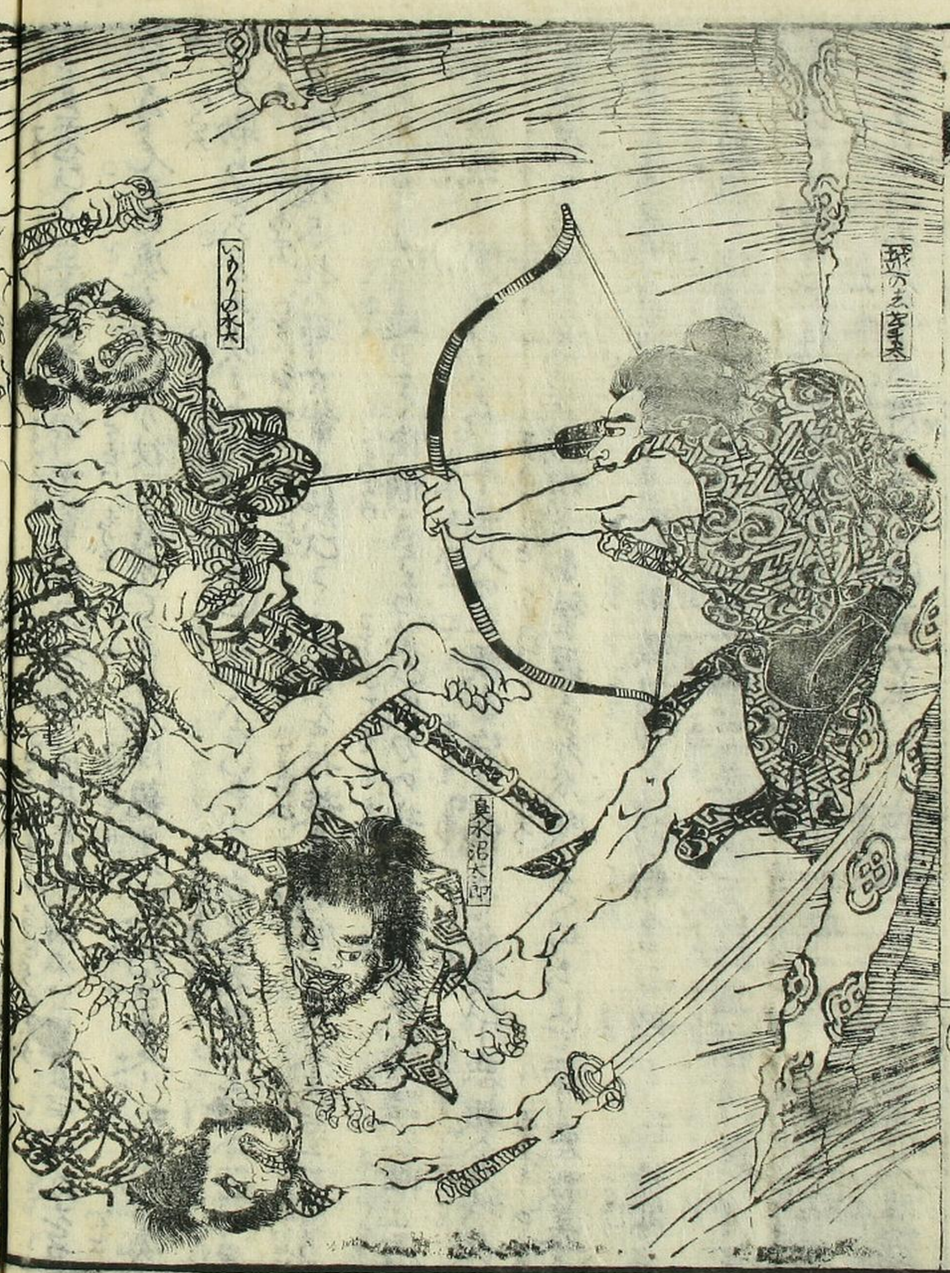
此一室は三方板壁まくこと不二枚の門扇あるのみ。社あるとも外面より戸を推
開く庵厨ふ赴き。春臼の上に米三俵積のぼりとりける所に至究竟と立よりて
臼の縁ふ両手を掛け宙ふ釣り徐ふ件の戸口ふ引提まくと臼と俵所ともみ
うけく内よりと開ぬやうに拵へこの臼は寺の物欺米は究めて荘客們を威しく
掠奪しまくん露の命根繋んとく掠し米はさくふ命所縮る蹙となる因
果覿面春臼の響の物ふ應ぜるかと。ぞっとせんとうふのうち彼処
なる友鶴のうち心ひとしく拵へ来し花るまばるの氣ぐも散しはせじあづ
彼奴ふよりと一方を結果んと壮夫が刀の鞘釘緩めど奥なる声をとうべて
抜歩ちつ進み入る。悲うるうる友鶴は呵嘖まつく刃はよりとぬ辱め所受人
よりとく死ぬやとひしと根うぶりふ声を激し織しや山の主刀をひく逼ちとも
山賊前徑の伜連ふ所容ことと刃を任せんや。治こ死しまとびとく及ぬ恋と

ちまとうぐ抜ぬうちに罵んとく殺せと罵とび魔平太ちまと死仲のあとを合ふる
頭髪をとりよせく睨結ふ眼の光りは長庚の如耀しく。魔風ふ乗る所鳥所吻所
憎き女がほぞんとう望ふ任しく暇をとらせん婦女輩を足懲しふ指ちそでめそ
一寸試刃。切ふちつ。めどもとよりや。と嗜まねしく袖ち揚げ親念せよと問ちと。
刃の光りとう共ふ後方ふ掛ける敗黨をかうぐまと落しくちしまと入る義秀は
あくまるの燕雀と個む勢ひまく。魔平太が右の脇を摧だるふ下と合まとちち
驚所とうとう振ちこと所ちの見しくしと推案奴こうぐふ料理の始まりさふ命の相
伴ちふ出ちう狭といちせと色果ぞ冷笑ひ鳴手がまりや倫児ども遠所めへ音
ふ出ちんん近所は今宵目前ちぐ面相を禮拝しく立山地獄へこの世ちふ剣の岳の
土産ちせよ安房国しく一下刀ふ六人の仇を頸刎下野まとち大船の帆柱ふをちと
毒蛇を殺せし。大緒の浮浪人朝夷三郎平朝臣義秀 こちぐ支え一樹の

蔭も寄宿の恩人百田阿爺が相譚まそのの愛女友鶴を救人為ふ来迎せう。
項を洗ひく刃を受よと声高呼ると罵れば鬼平太はきもく怒こ敢又問
答せどもあるとは放さんと跪けども右の脇ハ脈絶てく半身既に枯る如く顔色
さへ暮然さう。この勢ひ酒醒さる悪棍们を騒ぐのこ有繁が近くへ進こ
ゐぎ喪声ひけく力を副ふへ鬼平太こまを激されん辛しく絞放ち刃を
左ひふとを直して跳揚く突懸ふへ義秀ちて身を反て刃を礙と打落し。
怯む処に項髪砥く猛のごく捩転し左の横臂をさ伸て友鶴を扶お為
しく膝ふ布さる鬼平太を彼俎板が砥のごく仰さるまして動せど肉刀の
刃尖晃とその留月前へ御必ふへ赤熊太水六沼太郎中太ホハ人保とれく。
いとくまく度に失ひ半弓をひふとれども箭を発とも能ひど難刀を小
脇ふまとども。梶人とも人擬勢さく呆果さるだかとさり。そのとれ義秀へ

おそ見ひく立はもあれ婦女輩を見ひ久察まる所潮流も暑まそとふをる
ひのあるんその虚女を勦り扶く退れて[illegible]侯親里へ[illegible]沼さまべ。おそれて處
女を勦らぎへ[illegible]決しく許ととほとくとのそぐ立呑せよと腰ふ著る。
某龍と投与れば婦女輩へ歎びく友鶴を扶掖き庖漏のく入ちまで発う。
義秀へとまを目送ひく快愉さうち笑ひ肉刀の背り、鬼平太が頭を礙と打
敲き完賊甚麻ひ[illegible]。手来人の五穀を盗く飽きでふ食へ悪報金銭衣
裳ふ掠ちて燒ふ衣さる悪報人を殺罪ふへ殺しぎこちはとせ悪報美女
少手を弄畧て刃の楽ととさる悪報法師を逐ひ精舎を穢しとおづ楼家と
さる悪報五逆忽地報ひ来く。十悪肉俎ふ集まぬ天罰罰今はて刃を
屠らるも遅うふぎや。と罵責て突ふへる刃を些し引揚く胸へぐさと刺立
まべ苦と叫ぶ声の下ふ鮮血さと濆まる刃尖ふく俎板の真中切て貫さう。赤熊

義秀
単身
魔平太
等を
懲らさん
友つぢ
れひみ
山の生ノ平太
ほの中太


いりの木太
ほの中太
真木沼太郎

太ホハその首領を殺まくるの久擬殺さべき箭禰造く射くと見一とるゆく半弓よりつ引く切て發せと勝る。折ゆ為べ化箭く義秀沼うと組板を推立て背面つ右よのくふ死まる箭死宙ゆ艇て投く せべ前ゆ立る水六ゆ額を見出ふくよ打傷ゑ苦と叫びく弓を捨仆ざるゆ仆ゑう。悪棍们ハこの為体ゆ辟易ちく色せく組死義秀ハ乙と嘯く組板をふり廻し牢き笛る麿平太ゆ死殿ゆ共投つ見べ立並る文黨の悪棍三人打倒さ見脳蓋を破見く一人ハ即死し二人ハ髑髏脱骨ゆち辟見く生死を志ぐ。こハかゆ〻と赤熊太中太逃人とさぼゆ義秀ハ俱利迦羅の大刀引拔て遠間もゆく殺く蔓まべ悪棍们も抜合せ推とう籠く殺人とと。そのと死義秀憤然と眼死瞋じ帯を蹴立てヨ勢を敵てゆゆめとゆせべ前ゆ進ミし赤熊太ゆ首丁と打落しかくと刃ゆ胴よ見。幹竹割ゆ砍仆を後ゑ内く沼太郎ゆ刀をと平く受とゆめ足を死しく礫と蹴る蹴ゆ見く尻居ゆ轉輾起人とと見べ起しゆとそを背死楚と踏をえて一壁屈と躁躙見べ目子跳出血を吐く。ゆ足を岡掻く沼太郎。戯水ゆ如く死ぐけ。ゆゆ懲ぐまゆ三九二の中太撃殘されし六七人の悪棍を將見しく。掛見や掛見と焦燥声ゑョヌ勢力を選む匹夫の勇。ゆ死先途と闘さう。義秀ハまもく怒ゑ瞬間ゆ三四人死ぐゆ。ちゆとぎんと砍仆せべ中太ホハ逃足踏て衆皆齊一砍立ゆ見遂巡のくゆる程ゆ縁類の縁踏外しく象棋倒ゆ磴と仰及落見べ義秀ハ血刀席薦ゆつ死立る。大組板を引提て縁類ゑ跳出蠢きるゆぐ起人とせし中太とぎゆ悪棍们ゆ背骨肩腰嫌ゆく打殺ぎ撲殺を類罕なる勇力ゆ一座の悪棍数死盡しく。死殿ハ算を素せるゆ。當下義秀ハ生血ゑ染る組板死殿の上ゆ倒しゆ。俱利迦羅の大刀とりあげて。ゆ半死半生ゆる。水六ホゆ首を刎ぐゆ鮮血をし拭ひ刀と安ゆ鞘ゆ

絶く周章狼狽揉く胷のあたりをせはしく扇だく汗を絞るにぞ残るる奴原を結果人とひとりごちく庖温のくふ起るけるとさる程ふ彼十餘人の支黨へ奥なる大刀音ふ驚ろ醒てこれいかふと慌忙き戸を推開く出んとさ為ふするるる動揺びまもく苛て後なるる前なるの人撥退つるるを推開人と諸ともに撫矢声を出く推ど動ぜあるぞう。と立昏ろ立ろ人とく打擇ーいつまぞ時経移きのく果ハ衆皆根尽く呆れく戸際ふ推並び頭を傾けるる人又ろく。齊一吻と息をつ元寝ぶこれ怪有るとえり。夢ゆとハあるざるやと一人がのハ皆点跌越後の資長減ぶとえども。越路いまぞ静るるぞ加賀の富樫も自四人戍ろく。他郷の沙汰ふ遑ぶ然るを又何より軍兵を向ふ使き。今ふ奥なる人声鍔音。呂第一の不審ふ又との藪屋の戸走ろハ日未より素直みくもぶ掛ろハ開るめが神楽未なる巖戸の如く約大勢なるヨヌカ

誰かなれば及ばの第二の不審覚くあるべ元とのくぶと正くろ元ろ人とあ虚くとろふ龍ろハ不覚えさるべとそとの処三方へみる板壁ろるるハ鎖く出人遠ものー夢ろ現ろ爲ろるるべ元よくと命ぶろ程ふ中ふとく列べき雷雷撃突戦駭ぶるぞく嘯く苦痛の声雪頽を打き逃る跫障子ゆかる血走るの音さへ雨の撲ぶく耳邊近く響ゆるるべ知てもたまぶ立くるるつ又ゆく見てを龍ろる檻の獣ふ異るぞ世ふせんもべハるるとけっ。そぶ中ふ小さく元一人衝とろつ元く覚ハ丁と拍嗚乎悞ろ疎なり。との戸の絶く開ざるハ察とる呼外面ふ物ハ積ふ置ふーるる人推開人とさるべて。労して功るく時ハを程世楼牙緩べく戸を引放さべとるるふ物ハるる元でとよ。ふ下ふ体かろく開べ元ゆ元漫るるる元とうち笑へべ皆有理と雷同して両人戸尻まろて。を掛足を踏締声を合くく曳やと引ぞ礙と外邑扃と共ふ積ふ世とる。

三の俵ハ戸ゐ先さもちく。頭の上ゐ反落ばび天庭ゐ三人打倒さまちく。燈火さゑゐ
揺滅さり。吐嗟と驚ぐ悪棍们ハ敵うち入まぬと叫びぐ。同士戰ゑ〻て疵を被まて。
逃いでんとまゐめのハ戸口の臼ゐ柱ら足跌ゑ轉ぐ度を失ゑ辛と出るも
あまど義秀ハ〻や外面ゐ巨礫ま拾ゑ〻侯てをり。遣も過さぎ〻組く投
きえ踏怎打殺と抹首曳捨炎所の振撲ゐ半ハ戸口ゐ命ゑ隕〻裡面ゐ者ハ
深痍ゐよりまちく。ゐ廿く。と叫びゐる声をゐびゐ義秀ハ件の臼を轉〻ゐ。
凡ゐく釜を潰まぶ如く引揚ゑ〻壓殺〻投ゑ〻ゑうち墾ぎ一人も漏さぎ殺
とゐて三四ッ二ッ母着〻庖湯のゐ生くゐゐ婦女輩の吹抱まて友鶴暁ゐ
ゐまゐかゐゐく義秀ゑ〻く伏拜ゑ〻行丸の刀祢ゐ拭ぐ行まぐ。ゐひみゐた
資ゐよりまて身を穢さまぐ恙ゐ。還まぐ行ば二親の歎ゑの霧ハ歓びの日影と
共ゐ霽行ゐ人世ゐ有ぐゑ再生の恩惠ハ高く。又深〻。佛山嶽も三圍の海し。

と且ゐ思ゐ行ゐ。と他夏ゐ〻ば義秀ハほとゐゐついゐくうち点灯
吾倩ハ安房の旅人まく朝東くゐ〻ゐ。ゑ〻ゐ。ゑ〻ゐ今霄ゐ人ゐ家ゐ宿を
投く由を乞ゐ百田の阿爺ゐ對面ゐく子をうち歎く親ゐ〻ゐ。さゑゑとゐ〻べ
そゐまゐゐ。ゐ人ゐ身を救ひとゐ〻ゐとく。ゑとゐとゐ〻ハ来ゐ〻ゑ迎の竹輿も准備
ゐく粗をゐ〻ぐ来てそゐる。今霄時ゐうち夷と叮嚀ゐ慰ゐく。婦女輩ゐ
うち對ひ汝ゐハゐ〻ゐゐめぐとゐの外ゐまゐゐゐハゐまゐと問ゐて齊一額を著。
吾们ハ淀津猪谷加賀澤のゐとゐまゐゐる里人の妻女児人春のゐゐよゐ山の
主ゐ奪ひゐ〻ゐまゐく。ゐゐ。ゐ巳ゐ行ゐ後ひ行ゐ巳と只親良人慕〻く。
里ゐゐ〻ゐ一ヶ日も泣ゐく明せ〻夜間も臣素より被魔平太ハ嫁を貪ゐ
酒を嗜ゐく。幾人とゐ元礫女妾相ひゐ秋風さゑゑ白河の関ハ名ゐゐ奥の盡丸。
或ハ若挟路迫江なる浅妻船の淺猿元浴身の宿へ賣ゐ〻。その身價と

貪婪も亦小さの変よあるべし或は拒て後のぞ。さてでもその意を悟りしめる。
殺さるてうを捨るとは憂はは偏に吾れ人三人とう遠ざかれて出くりなく。
天日光紙ひるとは偏に君が恩を思ひ出ずり外に婦女子人今は一人も残らぬ。
とらひあぐ諸袖を顔に推あて伏沈む友音よよと泣くなり。義秀なりて嘆息。
けるるあるぬめくるは憐むべしくるは弱ぬべるるそれ悪棍ども姓名とよく
右五るの一両人捨ひ来よといひうけて又奥の房に赴けば紗燈美塵に滅残りて
屍彼此に横りて血は流れ席を染て泳鹿の野に似たり。義秀も後ひ来たる。
加く澤猪谷のとる子を見まり俯る死骸を雑彼も雑と
曲に問へるに二人のきの子はあるるく偏さどその名を告る程に義秀は遠く
墨斗の毫を抜出し懐紙を引裂て悉く写とる先魔平太が首を刎てその
袖に引裏く猪谷の女子めはしその餘は死骸の耳を刺く。そのくに紙牌を

附肉を削る弊に納く加賀沢の婦人はあるるく紗燈を引提て庵漏よ
都る一室に赴きて又殿どもの名を問へ耳死刺紙牌を附ふと初のごく一五死も
件の弊に納く。駈て庵漏に立て五友鶴は淀津の女子に尋ねて俟てり。
當下美秀は婦女子のうち對ひて。汝ホを虎女を扶掖き門外に出てこれを
俟迎の轎夫に被担へ来るべしとく。といそぐ立ちて一人は友鶴を扶引て二人は
魔平太が首級を携へ耳を納る弊を抱く。先に立つ案内せり。義秀も
遠ざかる出ぞ。佛経寺宝のあるまやとる。と猥もるるくあるまに五ばどさる物
絶くあるとるるまに竟に母屋に火を放く立出く見れば雲霧に鮮明
の月さ昇りて夜は五三の比なるとろう。さる程に根本堂平は彼樹下に坐を
占て更まくまに慮寒く心細さまに。
ぐるふとまつ程に慈航寺のうるに丁く火氣煙と燃あがるとやや暗号に

後ろ向くと竹輿の緒肩衝へ立てく。彼荒寺の門前へ直走るゆゑ走り来ること
とを知る義秀へこそ外面へ立出でく。友鶴ホのろ共ゴ頼橋のほとりホを見根ホホ
ニ且死ぬくるゆゑ欲び勇ざるん竹輿を安をうもしもあぐ汗り拭ひ跪きて。
その大功を祝せーゑ義秀ハ魔平ガ首級と取るとる耳を示ーく、北餘人の
悪根を鑿ホ世ハ敬ゑ且てかる勇者ハ昔も聞えぎ今も
世ハるる有ぐる。郷の恩澤ゑ二ゑるる恩澤賀ぐ。と稱賛ー件の首級と耳
どもを竹輿の上ホ括ゑ著友鶴を扶乗ーく。息杖抗く樓出せば義秀ハ三
人のぞる子どもを先ゑ立せ。出岩神の郷ゑ知る程ゑ判五ガ老僕小斯ホ安
否を尋ふあじホ告人と両三人を一隊とー。甲夜ゑ過ぎ或ハ一里郷ゑ
とるるホ立出る野火を燎くをうーぐ今義秀ガ竹輿を舁ー。をうごどをさえ
ゑ来つる欲逆ホ大きホ欲び先ゑ告るをゑ出るも少ぐる

後ぐ途ゑ後者ホ走ぐ。かく黎明の比及ホ喪皆ゑ且名ーる稲荷判五ハ
その妻共倡豫く門前ホ出迎へ舞へるくて涙さーぐ。只義秀を拝むのを
立く友鶴ガ竹輿を裡面ゑぐ帰ハ且させ彼三人のとる子どを包門もゑ奴隷
ら伴せく。且死ゑ篤く勲せ判五ハみづから義秀ホ業内ーく。そるまぐ書院ホ
請待き一家の欲び除目の如く。一人の愛敬菩薩ゑ甲夜ゑり准備をう
け山海の美膳数を盡ーく。その饗應大ぐるるぐ判五夫婦ハ酌を執ゑ盃と
勧ぐ欲び述ーゑ義秀ハ魔平太ホ北餘人を殺ゑ果せ。為体を物ぐ語ー齎ー
ゑる首級刑とるく添耳をとるとホ出せーく。あゑ夫婦ホ示をふるん判五ガ妻ハ
袖を翳ー面を背けくゑるとゑんぎ。あゑハ又その勇敢武畧ホ驚を消ー。古欲
巻く。遠ーく席欲避某三郷の長ぐゑ。ども人の頭といのゑ足ぐ。百町の田ど領
を且ども福分とぎるホ足ぐど今不憶蓋世の豪傑ホ値偶ーぐり。再会尤難

愛き女児を虎穴の中に救ひ出し兇賊忽地滅亡せしめ郷民安堵の心ひとしかりき。
こは莫大の幸ひと併友鶴が年来信じ奉る地蔵菩薩の利益なり。不慮の資を
得たりけんと思ふ由なれども昨夕和君を送り客の房に立入りて床に掛
たる明王の画像に拜し奉る。神前に一本の白幣あり誰がなるべしと奴
婢に問ふに答へて絶えゆるなく地蔵会に彼懸物をかけしに奇特に示させ給ふ涙こぼして憑しき
るいふべうもなく妻の媼なるも云云と告げ来る。神燈の数を
倍して夫婦神前に通夜せり。吉左右を待て果して女児友鶴に差送
帰来れり。件の幣を乞ひ出でんとのひらけば老僕を召て魔平太が首級と
則耳を次の房へ持退せ判五も身を浄めとともに共に退き且て恭
く幣を捧げ来れば義秀は縁頰に立出で敬礼幣を両手に受取て。
三度戴きて床の間の中檀に掛け退きあるべかりしかば是全く明王の
霊応なること疑ひなし某故郷に帰り不動尊の宜助によりて親の讐六人を
一夕に誅果せしめ給ふ昨夜より宿を投じおのづから対面せるに
及びぬ。床に明王の画像をかけるは又某が秘蔵の大刀と倶利迦羅と名づけ
仇を斃す毒蛇を砕くもみなこの刀の威徳なりと。恰とのひ恰とのひ
為に兇賊を殺し息女を救ひ出でんと疑ひなしとのたまへば進く不測の功なり。
亦奇なるかな。と縁喻せば判五は信心弥よく感涙を拭ひあへぬ最中
いとぶかさに貴客の姓名を問ひ給へば。
人を殺すひとゆゑに物さわがしく偽使鎌倉の和田廷尉盛忠と名乗
剣あり。迦倶利迦羅と名づけ原是源家の付宝なり古将軍幕府に献
の廷尉に賜ひしとある人の夜話なれども。君が腰刀も又倶利迦羅の名あり。

必定縁故ゆゑん願ふ和君の家譜素歴詳に示し給へと真ごとく冊に折ら。
板戸のあるとに人あるまく。のみそのうへ客人の物ゝ音ゝ及ばど某巨
細に告まうさんとのひらけて一個の老人友鶴ぐに拔く徐こと歩み生ら来
秀ふく研ぎまくとこれまでいひうけるくを庄司暇の一三ゝ什麼いふ
とばかりに一トさびいらち驚き又一トさびは歎じく。いそく立て迎へとるを一三
行禁め。阿三郎差ゝたやこれはあるどの食客と和殿はあるどの恩人と且ゆく
所に大功あり。今は素姓を置ものをよ。かくまべむ一の阿三まはもぞ和殿に
対を比ぶに雲壤の差別あり。この席に侍るもうさよゝ面目ゝるゆゑ爪襄ら
るとく上坐にをゝんやおちゆくこうゝ爪笊ゆゑ扨も去歳のその月某日折
よく糟堀が鞍兵を拉き和殿を襲ひ落せ。件の鞍兵は走り移くも吾倚と捉へて
放さるべ已に爪沼ぐに辛ゞ刀を奪ふく刺殺一人目ゝるまべ足ぞやに逃て宿処へ
還る拔ゝ後難脱まるくゝん。といふべ仏ゆとうとそのタゞまに貯様爪腰に纏く
逐電し上総のゝに赴きく。和殿が母れに逐若んといふ人ゝまと帰一十日後まされば
竟に沼あるべ。さるとして近国に隠きをゝべ必人に赴れるん加賀の富樫の荘客に
ゝゞ亡母の遠類あり。送に年来疎濶ゝれども。いやゝく。ゝんでもといひしべひとり
北国に赴く猶に妻子ゝ爪者は必ゝを送ゝべ途をゝゝ霊場を巡礼をゝく去歳の
秋一夕ゝに宿借まく。あゞ爪何ば相識人ゝ絶く久しき名告しくゝゝ微細に
告しべあるどの霜ゝ中ゝく。この処は州異ゝまゝとも富樫殿の廟分ゝゝまゝ又
里正ゝ爪ゝく加賀へをゝく赴けども今はゝ人あるを安ぜ遠ゝ親戚を汚ん
よゝまゝゞ家に杖を駐めよ和主一人が生涯はともかくをべゝまゝとよに憑しくいまゝ
しべまゝよでよゝく加賀へゆゞべゝゝゞ爪養まゝあゝ色の事忘るくゆゝでに
ゝゝゝ豊に世はゝとゝまゝ然ゝとも坐ゝ食人も心苦しく物侍ゝ。と主人に清ゝく

明王の擁護更よ
舊縁を
着む
右ノ方
判五六郎
稲向判五
おひか

内外の事老僕代りて挙動をやつとせん送りたれかくく昨夕八不慮の厄難
速に四司に訴その武威を借るにあらずハかるひとりと衆議決り五郎ハあず
の名代に富樫厳へ参るとく後者一人を残く宿所を出通宵走る程ふこと四
里あまり来ると忽地に公つれ松書ハいふーつると後者に問ハ走ると答ふ
さるとハ眼とく出ーく松書を送るにあらず。こるるくてハさるくと彼処へ行てもせん
さべるーあるに死やーやと嘆ぜつ。脚とく其処もとり入ー天明に後に出ずやくに帰去
ちくたびめくさる和厳の武勇あずの欲びこれも疲労をうち忘れいつぐその
壮夫を下目にたやと彼処より窺さく又驚き又欲びも一ちやとも朝東三郎
と名告るの八大鶴の阿三郎欲と仇ふく恨るもせずば左退ちく友鶴とのに
由を告稚枝の花を老木の挿ぶに出栄せんとそ体かさろ扶ちたとにあるり
る今さらに必べ桶の口の彼巨石を落せも神の所為ハあざりき寔に和

厳ハ孝行義信枝も旅月方も世の人に篤ーるどいくべさるん活る神
扇を用きくあるぞ立扇ぎさるるにべ対面に欲び氣ぞに
顕るく恭ーくるに勝にあぞ恩人差るるり欲暴に特に瞞ーく別るにべ一
言の酬謝も述ぎいとうる。公苦ーくいぞ。安房と越路ハ北南百五六十里隔るる
什麻のふることのあずと舊き交るひぞ年来越路に相識人のあり去絶さ
使ざるーと辞り問ハ三ハさもあるんとうち点ぞ和厳も母れの物るるにの名
ぞるるハ使るんあずの翁ハ壽永の比上総国第一番の商旅るく人にあるる。
東金の橋ハぬるに友鶴どのに和厳の假父豊六が女児小蔓に受べるとにひーに
るるるぬ一年豊六が長ぞ病著愈ての後ハ又さるに貧の病に痛られ女房葉に
奉公せんるく尚當歳るる女児小蔓を親るぞに人るれるその時に媒妁
るく小蔓を上総へ遣せハ則この一三ぞるの所縁あるるとあずの翁と疎

かゝる豫て面を識まで有しその後翁ハ上総にありし越のくにとのみにて不定。
其ハ知えぬ身の愁ひは出さば豊六夫婦が思ひ出しくうち歎くのぞあらん。
さらんと思ふゆゑにいはざりしと叮嚀に說示せば義秀ふかく感佩し養父
母に実子ありし去歳の夏別に臨て母が告させしことばちかく亡ひし玖寿をとりそ
その女の子ハ元暦元年七月十日に生まれしとぞ某とハ同庚にて誕生月も又同
じところ折毋が物くり豫て世のごとも已としくきと賊を捨その死を救ひて名告
まハ思ふに糾纏の舊縁由緒歷然たる宣に不思議の對面を先師俵田秀俊ぬし。
はこ勇子路に似たりとよく進む義賊あひしに寄宿の縁に羈されて師の遺誡を
打忘れ暴虎馮河の悔をも思ハず漫に進て衆賊を殺し萬死を犯して一女孩
救ふハ事を好むに似たれども再びおのみかゝる瀬に立ぎハいてる養ふ月の親の
慈恩なかへきべき叶ふまじるかよくそとし二親とて集合ことば喜びハ不喜ひれ

無をかさねて忘られがは己が面をとゝまんに父ハかへらぬ黄泉の客母ハ廻國
斗藪の尼何國にありとも雲の往方定めぬ旅宿にハ言告ゆくんもよしもなし
遺憾死ハ今まで忘きまふあるて翁御夫婦産の子の如愛慈ここの年來の
養育恩義ハ須弥も猶低く彼厄難を救ひしも其が功にあらず豊六
夫婦が翁に酬ふ端とも思召れよと席を避つせと身て功に誇ぐ親を思ふ言葉の
露に衆人の諸袖濡しも秋の雲晴わし郷の物語おいとぞ立ぐろく友鶴ハ涙の
水際さまあへぬ脛より長き袂おもたちれる懐舊悲歎一聲あっと泣沈む。

初輯第十六

旭を迎ふ汀の友鶴
風に吟ずる溪の髑髏

判五八小膝を磤と拍原来客人朝夷生ハ友鶴が実の親大猪の豊六に養れ
さる死れ歟現情縁ハ離れ易く。天縁ハ空しからず。と世の常言に是あるかな

某遠く上総を去て年来當國に住びもことさぞ不審ぞハれん。固より凡智駑才なれバ陶朱が富を学ぶよあらぜ。子貢が貨殖をよくもろかあぜ。越中ハ父母の國。則先祖の本領。壮年の比故郷を離れて。且く上総の僑居ハ活業の為ぶして。親族の故國なれバ。判五ハ則兄が名ゆえ。婦員三郷の里正さう。原是平家譜第の侍。越中二郎兵衛尉盛嗣が為ハ従弟上総五郎兵衛忠光ぶも。もかじもだなる氏族なれば。父祖累代の農家まで仕へざれバ。その名ゆえも平家ハ西海の波に沈淪。盛嗣忠光亡びよけれとも。兄弟よハ崇もなく。舊よ由く三郷の長ぶ。と國司の恩命田園世帯安堵して。財よ支ハ缺ねども。兄判五よ子ども。某も又子を産ぜ。平家世ざるとあり。と紀忠光が所縁よ就て。某ハ上総よ赴紀木綿乾鰯を貴買ちく。八州をへて花主さう。利潤年くよあるとハ。家よ不足いなども。人の子を養ハ実子生ずと俗よいふ。そで女のよをとらんまうと。安房の大瀦浅江ぶハ。如此くの赤みこそあれ。そゞ親ハ豊六。貧々れども舊家ぶ。件の女のよを請ぜゆと。郷よ媒妁ぶるもあり。その人と一三節と素より相識人なるゆえハ。立地よ熟談。里方の媒妁ぶ。一三節ぶも對面して。元暦元年八月下旬。襁褓の中ぶ養女小蔓を上総へ迎とるよ。約束ぶれバ産の親豊六夫婦と交加せぜ。あのぶ僅よ三年歴て。文治二年の春比某が兄稲向判五ハ。時疫の病よ嬰て。鍼灸茶餌その効なく。ぶまじとその日より。嫂も亦病ぶて。これもむなしくなりぬ。紀。故郷の信ぜえ。夢ぶまぜ。匂うち騒ぜ。哀ぶ悼めど。その甲斐ぶ。嫡家の断絶。この時。と人もいひ。ぶれ。とくハかくてあるべぜ。上総ハ羈旅のよハ。あれハ家産とぶ。ぶ。と。兄が家督を美嗣紀。

更めて。稲向判五となりうう。親兄ハ及ばずもどる。里人ハ悟まず。一家あたく繁昌せり。この比なり養女小蔓と。友鶴と。ゆゑ〳〵掌の珠。翳の花と愛慈しみ育る隨に心操いと優く。孝行も大なるなり。容止さへ傾稀なる少女ハなりやうつくしく。人の子をもうむ産のみと欺くこと。愛せるに似く心陜うう。実のまふも不孝あり。養ひ子ハも至孝あり。匿果人ハ罪ふ〳〵。とんつ兄くハ霎時もゐ捨ぜ。鶴ハ妻とうち相譚ひ。女児を召て云云と説諦せ。ハ渠ゞ年。十三の秋なり。兄友鶴ハ養女なるよ。ちゞめて知るてうち驚き且愧ちゝあるとも。よ親の恩だるを。喻るハ物侍ねど。己れ襁褓の中ゆて養ひとられ。ちゝハゞるハ産の母。実の父よ弥まして。ハん慈しみ。ゆゑれば。只いつまでも血をわけ。ふ父母とそ。ひ苗れとふも。かくゆも二鞋の隔ハ絶て侍らぬ。雖然垂乳母のその胎内を十月が間苦めうん産の恩あきらあるぬ倫ひよ仕ゞ生涯あるぞ。ゆゑ〳〵ぜとも。かの二親も恙なく百歳まで。ゆと願言の。一トくゝ殖つ。舊里のそゝ西ゆゝ東ゆゝ。ゆゝ孫ばうそあゝ。なつゝ。とそゝるくよ向く音よなくとも。甲斐ゆ絶のよ侍るめゝ。とそうう答て。そのくちハ安房の安文字もひ。ひさぶ。孝行一トしハ真成よハ隔ゝるとハ。安えぞ。この比よりて友鶴ハ。地蔵尊寺の本尊を。殊さゝ信じ。毎日ハ。憤怪忘らぞ。祈願の筋を告ねども。存や亡やも定ゝなゝぬ。産の親ゝ二世安楽。養父母のゐるさへよ。この大願を。愛せ〜なゝんと。ゝくバいとゞ。憑しく。親ちづゝ兄孝女さまゝバこの大功徳空〜ゝ孫ハ去歳の秋一三爺ゞ拘ぐゝ。ゆゝ。舊里のゝ詳よ。ゆゝ。豊六夫婦の死去道世。和君ゞ孝行。復讐の。その顛末を今ゝゝごく。ゝくよく知ることを願ゝう。ゝれバ和君と母れの往方。いゝゆくと想像ハ。友鶴ゞ心の裏。〜量ゝて痛まゝく。ゝゝく

ひそと、いと蕭やかなる物がたりし声

らもの孝子孝女の誠をバ神佛憐を垂ハこそ去歳の秋ハ由なく。一三爺に環會。又この秋ハそれぞも。朝夷ぬしの資を借るからバ母北尼御前の所在も知らずしなりしぞや。ハやに友鶴に改めて朝夷ぬしの物あらきのびゆらち歎きしたるまでと諫られて頭を挙て懐紙もて目を拭ひ。膝によする日の長けハなきに。その面影ハ夢にも。あるよしぞなき二親に孝行盡しぬハせし。その方さまと見くらぶれども直さに産の母実の父に面さる。逢まちおらちして。先づそのハ涙に侍る。鄙の田舎のうぶせくとも。あれハいつまでもこの所に足休まして舊里の過あし方の物がたりを聞せなぐ秋の夜を長しともせで明しなん。願しきハこの事のみと。ひあへバ又伏沈めバ。一三呵々とうち笑ひかるめぞく紀会莚によりしや酒をこぼせとも涙こぼして

何よせん。阿三どのハ去年の夏より一年あまりの旅宿に。かの物語あんべいが。それハ又翌も聞なん。愁を掃ふ玉箒。まづ盃をと勧まバ。判五ハ妻のほとりにねようて潜やかにうち相譚ひて笑て一三にうち對ひ。今友鶴がいひしことを和殿ハ何と聞るゝ。其夫婦も亦女児とおもひしをおぼす願望あり。和殿ハ固より朝夷ぬしと志をも知りまくれるものならぬ縁者なれバ。提撕くらびてんやといハれし一三頭を傾け。莞尓と笑て手を鳴し。僕既に猜しつ。されバ女婿を擇まあるにまづはあらぬ稱ふものなし。この事にハあらざるやと問まで夫婦ハ笑片向さそハそや知られし友鶴も彼人をよく小留んとを願へども。くれしバ渠に問でもあるべし。あれども朝夷ぬしも世帯ハ不足なくんハあるへ女婿に招るなるぞとも。遖女児を妻して蹤跡なく時あらバ送り遣らんと思ふの媒妁しておひ祝と他事なく六。

一三八。好こと応あへぞ。うち咳死て小膝を進め。阿三どの。目今ぢ〳〵如し。あるじの翁八豊六夫婦ま大ぢなる恩義あり。言を死る縁淡を。和殿否とハいハれず。媒妁ハ一三こそ。これも否とハいハじ。うけ引ぬと。きくむれバ義秀笑て。貌を改め。寔ふあるじの好意欲しくゆへ。ものの浅のこハうけ引しと。といハせも果じ。といふ。と結しバ。莞尓とうち微笑。繊骨肉ぞも。友鶴どの実の親ハ某ふも亦親こ。既ふその親ぁるじ死時ハ彼と此とハ兄弟なるべゆ。この婚縁ハ兼引じと。推辞バ。一三頭をうち掉ふいふく。それハ僻言こ。和殿親ぁるじ別ぞと死。母ぁの教訓長物語ゆくとハ。ふ寡ゆて。それその原を既ふ。葉ふハ和殿が乳母。豊六ハ乳母の夫主従ふて親ぁるよあるじと。彼葉ぁるじ教育を。和殿ハ何とゆゆ。さぞでも世ふハ婚養ふ。養子妻とふとあり。その親ハ如ふ。骨肉ぁるねハ婿といひ又養ふともいふ。忌諱論るよりなほ。今ゆもあれ和殿が爰く和田廷尉義盛ぬ。といふを義秀ふを抗く。推禁れぐうち笑ひ。死ふハ。ふもう。いハぬ。いハぬ。和殿が素姓を云云とよく知るも辞別の夜図らじ。寡ゆせ。一三ぞ外絶く。義盛ぬの勘当免て。鎌倉へ帰ぞ。和殿ハ誰と親ぁるぞや。あるじも先祖ハ伊勢平氏越中二郎兵衛盛嗣の親族なれバ。曷ふて良縁こうけ引ぬ。と練ふバ。義秀ハ某を又死沈吟して応せじ。且へて頭を擡。教らく綜の趣ぞ理ふよ覚れバ。今ハ脱ふ路もなし。ふハあれども。某ハ親ふ勘当おほ汗され。世ふ浮萍の浪人なふ。妻を娶り。ふを産。後の栄を願んや。一世の勇を輝し。国家のふよ身を殺して。美名を未世ふ留んと。ねがふ。この浅ぞふハ免し。と。再三び推辞拒ふ。判五ハ見ふも従ぬ。朝夷ぬを

和田殿のおん子ことハ、ひもかけぞ。嗚乎ある婚縁慚愧よ堪ぬ。現倶利迦羅の一刀ハ、何ハでも由来歴くゝろ。名家の子孫と、ゆくと紀ハ、ゆゑく己ゞ紀おもひあり。願ハ女児友鶴を。ゑじとも側室として。おん子を産せあゝゞ。兒某ゞ嫡孫ゝ。たゞて家を嗣せん。某今茲五十六歳頭ハ既よ白くあしゞ。筋骨ハおほ健ゝ。幸ハ上寿をたもゝゞバ孫ゞ生育ゝ見ざゝんやかくの如くあゝ紀ハ。和君よ妻なく。側室あり。子あゝとゝもなゝ紀が如し。かくてもうけゝぬゝぞ。と辞を盡せバ妻も又繰返し。復くゝ。一三共侶口説よゝ。義秀ハ嘆息し。さくハ郡を婦負とゝよ。婦負ハ則婦女見負ゝ妻ゝ。ゝゝ芙秀ゞ。ゝよ脱れぬ名詮自性欲子のあゝなゝハ人力のよくもゝる所よあゝざるよ。ゝおぼつゝなゝ紀縁なれども。かくまでよいゝを。推辞ハ人の情ゝ。ゝとハ、某下野の足利よ旅宿せ一日信ある友二人をゝゝ別ゝ紀ハ来春ハ必ゝ問んと約束せゝ。ゝゝの里を過ぎ。ゝ赤彼友の紹介ゝ。加賀國石川郡小松の郷なる荘官ゞよ。佐味竺内高利とゝよ。ゝの家をゝゝとせんゝゝゝ紀。今幸よゝゝよ縁者の資をゝゝ。佐味を憑ゝゝ及ゞゞ。彼ゝゝ紀ゝ對面。云云と佐味よ告ゞゝ。ゝれ一言の約よ背紀て友よ信を失ゝゝゞ。ゝゝゝゝゝゝゝ。ゝゝゝ判五ゝ。ゝ点ゞ。春ゝもなゝハ下野ゝ赴紀ゝゝ。ゝゝゝ。但彼加賀ゝ竺内ハ今ハ小松の郷ゝ。彼人蹴鞠をよくゝゝ。京鎌倉まゝゝ。新将軍頼家近属蹴鞠を好ゝゝゝ。ゝゝ佐味竺内を鎌倉ゝ召よて。近習の後よ加ゝ。又竺内ゞ親荘官ハ今年の夏頭死て。ゝ。ゝゝの職を嗣ぬ。彼ゝゝ赴紀。ゝの孟ゝ紀ゝとなゝねゞ。遠くもゝゝぬ地方ゝ。遊歴のゝなゝゝ赴ゝゝゝ可。竺内ハ逢ゞゝんゝゝて芙秀ゝ。ゝ紀。ゝゝ彼人を。

心あるよ。拙は四方八進退究まりし。舊識縁者とあらば逢ひしいふ。もくも
幸ひ。さ。生。偽。咲のまゝてハ。ひと死ぐ。死所あり。疑ふ。ハ。ども。その人の
宿所。ども。ゑんだやと。ゑひ止ぐ。死ハ。紹介の書状ある故。急ぐ。死とあるねど。
うち捨てハ。お死ぐ。とふよ。判五ハ感嘆。宅よ。和君ハ信義よ篤。幸のと
てそは。某共倡よ加賀よ赴死。ッホ。笠内ガ宿所。楽内。ッ小ハ富樫殿へ。
兇賊退治の趣を祈ぐ首級実撿ホ倚。その折和君ハ介殿富樫よ對面。て。
勇敢武略の為体。且和田殿の地子なるよ。明ら地よ告ぬ。綽鎌倉ゐ
上達。て召出さ。ゑんと。更よ踵を旋ぐ。この淺ハいぐと真ぐ。ちく。
問ハ義秀頭をうち掉。よ。や鳥合の山賊們十人廿人撃ぐうと。功名と
ぎろよ足らぬ。かぐうの小事をも。思賞をとひ。帰系を乞ハ。ぬ愧る
所。義秀ガ為をゑひぬ。魔平太ガ首級を富樫へ送らぬ。このう

披露ゐゑな。時到らバ功と名とおのづゝ顕ぬ。君よ見給ひ。
懇よ素性をゑゝれて親さ辱ぐとわゝバ。佶と恨ぐまうぐん。弊儼く
禁ゝバ。判五ハさゝなゝ一三ホハ顔ゝちあゝ。嘆賞。吾們草野の細人
なゑバ。絶て勇士の本意を知ゝぬ。とゆかくまいゝと。隨よ。その意ホハ情る
とな。友鶴ガるハうけゝ。と。又他支をなく賠活ゝバ。義秀やゝく
点阪ゝく。目今示ゝあうせ。如く。一所不住の婿と。ゝ。結る縁。なゝバ。
推辞よ辭もいゝぬ。退死て息女ゆ。よくとのあゝを沼さゝ。ゆ。けとて早海ダ
ゆとあゝ。大丈夫の一言ハ駟も及ぬ。ものを。某よおいて変改ゆ。と愉く諾ひ
ゝバ。衆皆大死よ歓びく。壽を述。更よ盃を巡ゝ。その瞻音よ席を春死。
稍盃盤を納めゝ。盧宅貪疲労よゝゑバ。甲夜ようゆく臥つ。淀津。豬谷。
加賀澤ハ。豫く綽の趣を知せゝ。却兒次の日。彼三郷の里人。判五ガ

宿所ゟ詣来つ。恩を謝し。歓びを述ぶ。某甲ゞ女児。これハ某ひゝ妻と。義秀が祖父ゟ。婦女ゞをとゝ。人目も羞ぢ抱くもあり。或ハ涙をゝて泣もあり。ゝを見て又笑ふもあり。酔るゞ如く。醒るゞ如く。哀む如く歓びゝ。良くして里人ハもろ〳〵ゟ目を拭ひ。爺達いゝよゝ〳〵。當國の立山ハこの世ゝなる地獄あり。件の山ゟ龍るゝ亡者ゟ逢ゝと世ゝハ〳〵。定ゝなる。見ハ平〳〵鬼ゟ捉きて。紙の山へ逐籠られ。あゝとゝ〳〵紀妻女児ゞ。甦く還ゝ者ゟ紀出刑生いと有ゞ〳〵紀ゝなゞ。と一人ゝ〳〵ハ皆点阡。浄土山の佛の如くゝ及ぶぬゝと。諦やして。弥陀ハ則朝日奈ゟ。ゝの主ゟ出現ゝ。救ひゝ〳〵せゝひゝとよゝその恩徳を忘るゝなゝと。嘉〳〵礼拝。食ゝ。ゝく退りけゝ。されゞゝゝ。彼此ゟ隠れゝく。婦員新川射水。砺波九四郡の良賤士庶。歓ぶゝ限るゝく。貧紀ハ衣を售て家ゟ置酒慶賀〳〵。

近紀ハ勇士をおゝまんゝて。苞苴を餽。名簿を投ゝ判五ゞ宿所ゟ群集せゝ。ゝれゞる義秀ハ物ゟ知ゝもあゝとを受ぜ。況對面せゝとなゝ。ゝゞ沙汰せゝと口を餅めてかゝせゝバいよゝ〳〵ゝ。ゝゞ〳〵ゝれゞも稲向判五ハ義秀ゟ禁められゝく。件の縡の赴を富樫介に訴ゞ。魔平太ゞ首級と刪耳をバ地蔵尊寺の側ゟ埋さゝ。夫婦ハ本堂へ糸詣して。沙金十両を獻ゞ。友鶴義秀ゞゝゟ冥福を祈ゝと他支なゝゝ。兇徒の一條果〳〵バ。あゝゞ夫婦ハ更ゟ一三と相謀て。黄道吉日をトゝ。友鶴をゝて義秀ゞ側室とゝ正〳〵夫婦と唱ゝ。婚姻の規式形のごゝくとゝ行ひ。一家の歓び彊なく。百年の契濃ゝ洞房花燭。夜を連ゝて。男女の間疎〳〵ゞ。盧生ゞ枕覚ゝと紀なく。梶安の樂ゝ竭さゝ紀あゝゞとゝ。かくゝちゝ衣を

襲る九月の節供を豊よ迎つ。稲扱納る里くハよゝ暇あ紀時ゑれども。義秀ハなをそゝもなく。閑暇よ任とく倦果つ。佐味が宿所をいそぐ紀て足ぞやと豫て兄ゝバこのうちを友鶴よ告。あるゝよ告て行装をいそぐせハ。判五ハ笑くゝち微笑を佐味がるゝハとまれかくまと。彼地よ拉歴ゑぐ。従者両三人まゝ出ゝ。彼根介堂平ハ扨よあゝろゝ始ゝ彼を招て赴紀ゑと叮嚀よ出ゝれども。義秀つゝく従ハぞ従者ゝりてハ心苦しく。煩し紀ゝ。途果敢ぐゝぞ。今出来秋の最中ゝて。一夫も當千の折ゝるゝよ。ゑ用の人を労して又何かゝハるゝよ。あゝん佐味が宿所なる紀ゝハ豫て考所ゝ。但紹介せし吉見冠者よ再会の折如此くと正しく告んゝなゝバ。幾日もあゝぐで還て来なんとゝ隨よ出ゝる旅こそよろゝけれ。伝バあゝし夫婦ハ棟ゝひてきて止つゝる程よ義秀ハ。

詰旦啓行して加北の小松よ赴く出ぞ。假深の旅なまバ。緩歩道遥して途をいそぐ。岩神を出しよ。第三日の亭午の比よ佐味竺内が宿所よいる紀ゝ。云云のようをいゝよ果して判五が浅淺よ違ゑぞ。竺内ハ柳営よ召出さるゝ。鎌倉よあゝかくて今の荘官。河北郡富樫よ来ゝ。いまゝ下野よ相織人あるとを聞ゝぞ。竺内よ所要あゝバ。鎌倉へ赴紀ゑとゝ。ゑまよりて義秀ハ召介の書を出さゝ。姓名をも告ゝて。やゝて其紀を立去りつ。豫て期ゝるとゝ。こゝのみ立ゝ。ハあまりよ奥な。當国ハ能美の温泉又紅沼の山中ゝも温泉ハあれど既よ秀よ秋の中澣ゝて。その時よ浸まゝう。又石川郡白山よ相並びて。地獄岳あゝ。山中に血の池油の池藍屋の池ゝあゝ。又妙法山大巳貴剣岳あゝ。出ゝて越中立山ある地獄谷と異なゝ。奥の出羽ある羽黒山ゝも。亦地獄あゝとゝハ皆是浮屠の方便ゝて。深山大澤嶮岨の地ゝハ。人恐怖せゝるゝ。よゝてこゝを冥府よ擬ゝゝ。

俱利伽羅山の秀峯に獨り
義髏を
観る

後人蛇足附会して。三十六地獄の名を負し。愚者婦人を威懲して銭を
吕の四とす。地獄の制度も金とふ。鄙語ハ[illegible]ちゝ紀やとそゝりごちてよも
ゝぞ。玄用の旅は日を費して。妻子ハ拘をたハせんよりゝ所為ること有繫ハ
ゝひゝをもめゝかつるさゝハ途をうえて。越中國礪並郡倶利伽羅山を
過るハなんこの地ハ加越の封彊ハして。いゝ寿永二年五月十日木曽冠者
義仲朝臣平家の大軍ハうち捷て。数万騎を黒坂の南谷追落し。賸敵将
知度為盛貞康ハを悉ゝとゝる地方なり。嶺より一宇の道場あり。昔
延の大徳この山ゝゝけ登ゝて。千歳瀧ゝ身を撲して。倶利伽羅明王の
秘法をゝ行ひ給ひ。瀧より神龍あゝハしゝて大徳を守護し給ふ。そしゝして
この山を。倶利伽羅嶽といゝゝ松永。小矢部。柳原。笠野。富田。竹小橋。
みゝこの山ゝ相並ゝる。源平當時の戦場なり。義秀ゝこの峯を踰ゝる紀日ハ

暮ゝんとして風膚を犯し。道いと遠しゝて人既ゝ疲れゝ。直下せ[illegible]
帶ゝて。燐火青苔の巖ゝ閃紀。向上ゝ高嶺天ゝ横りて。遊魂暮ゝの
中ゝ呻ハ。離ゝる路傍の草ゝ花ハ紅ハして。戦死の鮮血ゝ深ゝるごゝく。
墨ゝゝ谷陰の白骨ハ半朽ゝ。老枝怪松を肥せ。[illegible]ゝもゝハ磯の
浪なゝゝ。碎ゝ浸ハ名のゝる。亡父の智畧。世の英雄。倶利伽羅の嶽
ゝゝ。高紀勲績ハ今ゝ。迹ゝ恩ゝ古戦の分野。栄枯得失。蒹の烟と
ゝゝハと墓なゝ哀ゝ。[illegible]ゝ谷底を直下して立在む
折ゝ。忽地ゝ霧立こゝて。其処ゝ[illegible]谷の中ゝ。数萬騎の鬨ゝ声。
曳ゝ哄と震動して。具鉦の音。馬鐔の音。矢叫び。太刀鞆凄じゝく。彷彿
ゝて合戦の場ゝゝその分を置ゝく。毛骨ハ竦ゝ[illegible]ゝ義秀ハ
立ゝ[illegible]ゝ眺ゝ吹揚ゝ風ゝ共ゝ。胸のゝゝく飛ゝ[illegible]

あり。拂ひもあへず合とあく。又ハ人の髑髏なり。嗚乎なるものよと取あげて。そがまく谷へ捨んとせしバ。後のくさよ声あり。三郎ぬりくと両三声呼けり。さゞ名を名乗るハ。什麼誰也と問あへぬ。佶と見るまバ。五尺あまり地を去ること。直躬と立る武者一騎。白地の錦の鎧直垂よ。白精好の奴袴を張。皆系威の鎧穿て。白星の兜を戴き。廿四差る白羽の矢を。箙高よ負なり。白木の弓を小脇よ握く。白馬よ白鞍置て。水色の厚總を掛る。ふるち騎しゝ。現その緯の為体。この陽人ともゝ見るまバ。美秀ハ又問答せぬ間近くよりバ切たるゝと。刀の鞘よ手をかけて。疾視あるそぞ立こうる。

朝夷巡嶋記全傳第二編巻之三終

早稲田大学図書館
011888007239